

天台智顕伝と社会背景・資料

池田魯参

天台智顕の伝記を正しく解釈することは、彼が生きた歴史の現実がどのようなものであつたのかを問うことであるのに他ならないわけで、そのことは、教学思想の拠つて立つ時代的背景を明らかにするのであるが、それはそれだけにとどまらず、成立思想の原理的な課題にまで迫るものであると考える。

私はすでに、印度学仏教学研究第二十一号誌上において、「智顕滅後の天台教団と動向」と題する論文を発表し、智顕伝のトータルな把握が、教学研究の場面においても、極めて重要な契機となることを説き、智顕と交渉があつた出家僧に限つて、伝記資料を整備し、智顕滅後の教団の動向といった別の異なる観点から、いくつかの問題点を指摘したのである。したがつて、そこでは在俗の人たちに関しては問題を保留にしておいたので、その残余を補うという意味において、

本論では、智顕と関わった在俗の人たちに焦点をしぼつてそれらの人々の問題点を整備してみたのである。

天台の教學史の研究からいえば、出家僧の場合における問題の直接性に比べ、在俗者のそれは必ずしも第一義的な課題であるとはいがたい。しかし、そうはいつても、少なくとも一個の思想が時代を動かすというそのことは、幅広い底辺を有する人々の、具体的な現実として、その思想が生きた、ということを意味するのだと考えられるから、その点からいえば、この種の問題に対する関心は決して無意味ではなく、軽視されてよいはずはない。殊に、正しい智顕伝の解釈といふことを目指すなら、それどころか、この一面の研究は、むしろ不可欠な限定要件であることが知られようと思う。

先ず、智顕伝に現われる在俗者には、どのような人たちがあるのか一覧表によつて掲示しておこう。整理法は、前の出

家僧の調査に採用した方法に隨い、灌頂撰する『隋天台智者大師別伝』一卷と、『國清百録』四卷。それに両伝を承けた『続高僧伝』習禪篇所載の、「隋國師智者天台山國清寺釈智顕伝」の、三種の資料において、智顕伝に関わる人たちの總体を整理してみたのである。その結果は次の如くである。

尚、表記の数字は、別伝、智顕伝は大正藏經五〇卷の頁数。百録は編纂収録の見出し番号。又備考欄の梁は『梁書』、陳は『陳書』、隋は『隋書』、周は『北周書』、齊は『北齊書』、南は『南史』、北は『北史』を各々指し、下の数字は伝を立てる卷数を示す。

〔1〕『別伝』、『百録』、『唐伝』所載の「智顕伝」に共通して出る人。

7	6	5	4	3	2	1	人 名	別 伝	百 録	智 顕 伝	備 考
徐孝克	毛喜	徐陵	永陽王伯智	陳少主	陳宣帝	梁武帝					
193c	192c 197b	192b 193a 194a 194a 195c	193c 194a 194a 195c	194ab	193abc	194b					
21 104 東海	序20 陳吏部尚書	10 19 20	11 15 16 17 楊州刺史靜智、靜惠	11 12	序8 9 10	12 43					
567c	564c	564c	565	565bc	565a 567c	565c					
陳26 南62	陳29 南63	陳26 南62	陳26 南65	陳28 南65	陳6 南10	陳5 南10	梁1 南3 南6 7				

5	4	3	2	1	人 名	別 伝	百 録	備 考
黃 吉 寶	朱	趙 君 卿	沈 君 理	蕭 繹				
194 b 左右	194 a 主書	194 a 伝宣左右	192 b 儀同	191 a 梁湘東王				
11 左右	11 前主書朱宿	11 宣伝左右	18 19 陳儀同	17 梁湘東王				

〔2〕『別伝』に出、『百録』に出る人。

9	柳 顧 言	195 c 197 c	104 子 75 76 77 79 81 82 83 101 弟子柳 府儀同三司臣	27 29 50 57 58 66 86 93 100 101 弟子柳	序 24 54 55 59 63 65 68 70 74 皇帝 93 94	566 a	隋 58 北 83	隋 3 4
---	-------------	----------------------	--	---	---	----------	--------------------	-------------

14	13	12	11	10	9	8	7	6
張造	衛伯玉	房伯奴	丘彪	王弘	秦孝王楊俊	劉璿	少主皇太子	陳建宗
197a 土人	197a	197a 連水県人	197a 連水県人	196c 司馬	194c 秦孝王	194c 主書	194b 請戒文	194b 主書
74土人	衛伯生	74 徐州鉅縣眸陵鄉東鉅里軍人	74 海州沐陽縣須仁鄉義全里軍人		66 69 79 司馬、右庶子	23 93 秦孝王	14 主書	12 開陽門舍人、主書

[3] 『別伝』に出、『智顕伝』に出る人。

人名	別	伝	智顕伝	備考
積	袁子雄	陳始興王叔陵	陳始興王	陳始興王
195 b 荆州總管上柱國宜陽公	193 b 陳郡	192 c 謂陳郡	564 c 陳始興王	565 b 令陳郡
566 c 總管宜陽公	565 b 令陳郡	564 c 陳始興王	564 c 陳始興王	565 b 令陳郡
隋40	隋40	隋40	隋40	隋40

[4] 『別伝』のみに出る人。

人名	別伝	備考
朱异	梁38南62	梁38南62
王琳	齊32南64	齊32南64
王凱	191 c	191 a
何凱	192 b	192 c 金紫光祿
孔固	192 c 侍中	192 c 僕射
王煥	192 c	192 c 新野
周弘	192 c	192 c 臨郡
庾崇	193 b	193 c
計詡	193 b	193 c
陳南34	陳21南27	陳21南27
陳南27	陳21南23	陳21南23
陳南34	陳24南34	陳24南34

9	錢玄智	10	陳文帝	11	高孝信	12	張達	13	馬紹宗	14	孫長	15	張達	16	陳鍼	17	張果
193 c 群守	193 c 陳文皇太子永陽王	193 c	193 c 吳州侍官	195 c 行參	196 b 吳州	196 c 土人	197 a 土人、母俞氏	197 a 梁晉安王中兵參軍	197 c 梁晉安王中兵參軍	197 c							
陳3南9	陳文皇太子永陽王	陳文皇太子永陽王	吳州	吳州	吳州	吳州	吳州	吳州	吳州	吳州	吳州	吳州	吳州	吳州	吳州	吳州	吳州

〔5〕『百録』のみに出る人。

9 諶	8 陳 文 強	7 少 主 后 沈	6 李 善	5 施 文	4 羅 闡	3 蔡 微	2 景 歷	1 曾 義	人 名	百 錄	備 考	20 吳 明 徹	19 蔣 添 攷	18 方 茂
16 永陽王息	15 永陽王左右	13 後菩薩 16 海慧菩薩、 安德宮太	12 後閣舍人	12 舍人	12 主書	11 96 臣徵神筆、 前陳侍中 安右將軍中書令領軍將軍 南雍州大中正新豐縣開國 侯弟子濟陽	8 9 10					197 c 儀同公	197 c 大中大夫	197 c 梁
		陳 7 南 12				陳 29 南 68	南 68					陳 9 南 66		

26 達 奚 儒	25 魯 子 譽	24 鄭 子 良	23 李 元	22 秀	21 王	20 傳 仲	19 裴	18 李 元	17 李 德	16 隋 高	15 羊 公	14 嚴 祖	13 陳 要	12 陳 思	11 計 尚	10 桂 陽 王 伯 謀
管 55 65 上柱國斬郡公荊州總	45 統軍	44 奉內史舍人長坦男臣	44 內史侍郎武安子臣	44 兼內史令蜀王臣	39 江州正倉主簿	39	22 內史舍人	22 內史令安平公臣	22 內史令安平公臣	22 內史令安平公臣	22 內史令安平公臣	21 104 文皇帝	21 箇王	21 其猶子	21 104 宣猛將軍臨海內史	21
隋 53 北 73							隋 67	隋 57	隋 42	隋 12					陳 28 南 65	

41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27		
元襄	周武	虞世基	未上	盧政力	李大方	蔡恪	段興	張諧	張威	張衡	吳景賢	李膺	張四娘	潘惠達		
93 梁大宰南平	93	89 大都督兼内史侍郎臣	89 柱国内史合葛国公臣	舍人	序 89 90 91 兼内史通事	88 通事舍人	81 楊州司功參軍	81 楊州總管府遣參軍	75 郎兼通事舍人、大都督朝 散大夫兼内史舍人臣	76 右庶子黃門侍郎	77 員外散騎侍 郎	78 91 90 員外散騎侍 郎	79 63 典籤	71 儀同	57 上開府	
南52	周56 北10	隋67							隋66	隋56 北74						

〔7〕但し、「百錄に」出、「智顥伝」に出る人は一人もなかつた。
 次に、これらの人々が、智顥伝のなかで、はたしてどのような役割を演ずるのか、記録に表われるところに随つて、各々を重点的に読んでいこうと思う。

4	3	2	1		人名	智顥傳備考	48	47	46	45	44	43	42	
楊素	蕭妃	徐儀	陳暄				王宣武	孔玄達	解拔國	蕭通國	陳子秀國	蕭子琮國	皇甫毗	
568 a 尚書令	567 a 晋王	567 a 東海	565 b				104 岳州刺史、君宣武	104 土民	104 臨海鎮將	101 使人	99 菩薩戒弟子、道因寺	95 後梁主	94 當陽縣令	
隋48		隋36												隋79 周48

〔6〕「智顥伝」のみに出る人。

〔1〕三伝に共通して現われる人について。

1 梁武帝。

○靈耀寺から光宅寺に請住する夢告。△然居靈耀過為為褊隘、更求閑靜立衆安禪、忽夢一人翼從嚴整、稱名冠達、請住三橋、師云、冠達梁武法名、三橋豈非光宅、遂移居之（別^{194b}）。△口勅治光宅寺。光宅是梁武竜潛之地、不整處多、今勅善

量隨由就功、一二羅闈取來意（百12）。△未為靈曜褊隘、更求閑靜、忽夢一人、翼從嚴正、自称名云、余冠達也、請住三橋、顯曰、冠達梁武法名、三橋豈非光宅耶（唐^{565c}）。

○晉王広、建初寺烏瓊の袈裟を賜う。△弟子總持和南垂賜万春樹皮袈裟一縁、述く是梁武帝時外國唯獻三四領、今余一、而是建初烏瓊法師所披、謹尋菩薩戒稱所著袈裟、皆染使壞色、況復自然嘉樹妙彩天成、相應之言無旁外假、万春表長生之称、一二翼合善譬之辭、水服周旋恒充布薩、常事半月一豈唯元日、著如來衣荷慈獎謹和南（百43）。

2 陳宣帝。

○天台山に隠るを許さず。△陳宣帝有勅留連、徐僕射濟涕

請住、從物議直指東川、即陳太建七年秋九月初入天台（別^{193a}）。△陳宣帝勅留不許入天台（百8）。京師三藏雖弘皆一途偏顯兼之者寡、朕聞瓦官濟濟深用慰懷、宜停訓物、豈

遑獨善、一二曾義達口具得朕意也、四月一日臣景歷。○始豐県の調を割いて衆費に充つ。△陳宣帝詔云、禪師仏法雄傑、時匠所宗訓兼道俗國之望也。宜割始豐県調以充衆費、兩戸民用給薪水上（別^{193b}）。△太建九年宣帝勅施物（百9）。智顥禪師、仏法雄傑、時匠所宗、訓兼道俗、國之望也。宜割始豐県調以充衆費、蠲兩戸民用供薪水、主者施行、二月六日、臣景歷。

○放生の池のこと。△降陳宣帝勅云、嚴禁采捕永為放生之法、陳東宮問徐陵曰、天台功德誰為製碑、答云、願神筆玉著、會宣帝崩、不復得就、勅國子祭酒、徐孝克、以樹高碑、碑今在山、覽者墮淚（別^{193c}）。△〔1〕7徐孝克の項参照。△陳宣下勅、嚴禁此池不得採捕、國為立碑、詔國子祭酒、徐孝克、為文樹于海浜、詞甚悲楚、覽者不解墮淚（唐^{567c}）。○修禪寺の勅号。△至大建十年歲在戊戌、降陳宣帝勅名修禪寺、吏部尚書、毛曇、題篆榜送安寺門（百序）。△太建十年宣帝勅給寺名。具左僕射、徐陵、啟智顥禪師、創立天台宴坐名嶽宣号修禪寺也、五月一日、臣景歷（百10）。

3 陳少主。

○還都の上奏。△陳少主顧問群臣、枳門誰為名勝。徐陵、對日、瓦官禪師、德邁風霜、禪鑑淵海、昔遠游京邑群賢所宗、今高步天台法雲東靄、永陽王、北面親承、願陛下詔之還都

弘法使道俗咸荷（別¹⁹¹a）。△陳帝意欲面礼將申謁敬、顧問群臣、釈門誰為名勝。陳暄奏曰、瓦官禪師、德邁風霜、禪鏡淵海、昔在京邑群賢所宗、今高步天台法雲東藹、願陛下詔之還都、使道俗咸荷、因降璽書重賛徵入、願以重法之務不貶其身乃辭之（唐⁵⁶⁵b）。

○勅して都に迎う。△〔2〕3趙君卿、4朱雷、の項参照。

○路次に勅す。△〔2〕5黃吉寶、6陳建宗の項参照。

○僧尼の檢括を停む。△陳主於広徳殿謝云、非但仏法仰委、

亦願示諸不建、陳世所檢僧尼無貫者、万人朝議策經不合者休

道、先師諫曰、調達日誦方言不免地獄、槃特誦一行偈獲羅漢果、篤論唯道豈閑多誦、陳主大悅、即停搜揀（別¹⁹⁴b）。△陳主於広徳殿下勅謝云、今以仏法仰委、亦願示諸不逮、于時檢括僧尼、無貫者万計、朝議云、策經落第者、並合休道、頃表諫曰、調達誦六万象經不免地獄、槃特誦一行偈獲羅漢果、篤論道也。豈閑多誦、陳主大說、即停搜簡、是則万人出家、由頃一諫矣（唐⁵⁶⁵c）。

4 永陽王伯智。

○方等懺法を行ず。△陳文皇太子、永陽王、出撫甌越、累信毀勤、仍赴禹穴躬行方等、眷屬同稟淨戒、昼食講說夜習坐禪（別¹⁹³c）。△永陽王伯智、出撫吳興、与其眷屬就山請戒、又建七夜方等懺法、王昼夜理治、夜便習觀（唐⁵⁶⁵b）。

○觀音懺法を行ず。△王後出游墜馬將絕、越乃感悔憂愧、若傷先師躬自帥衆、作觀音懺法、整心專志、王覺小醒凭機而坐、王見一梵僧擎香爐直進、問王曰、疾勢何如、王汗流無答、僧乃遶王一匝、香氣徘徊右旋即覺搭然、痛惱都絕、戒慧先染其心、靈驗次悅其目、不欲生信詎可得乎（別¹⁹⁴a）。△俄而王因出猶墮馬將絕、時乃悟意、躬自率衆作觀音懺法、不久王覺小醒、憑几而坐、見梵僧一人擎爐直進問王所苦、王流汗無答、乃遶王一匝、坦然痛止（唐⁵⁶⁵b）。

○願文を著す。△其願文云、仰惟天台闍梨德侔安遠（中略）安養兜率俱蕩一乘（別¹⁹⁴a）。△永陽王解講疏（百16）のなかの文の要約。△仍躬著願文曰、仰惟天台闍梨、德侔安遠（中略）安養兜率俱蕩一乘（唐⁵⁶⁵b）。

○都に出ざることを諫む。△永陽王諫曰、主上虛己、朝廷思敬一言利益、則四生有賴、若高讓深山則慈悲有隔、弟子微弱尚賜迂屈不赴台旨將何自安（別¹⁹⁴a）。△少主勅東陽州刺史永陽王、聞下王枉州迎禪師、大弘法事甚会朕心、今迎出都、王宜敦諭申朕意也、正月十日、臣徵（百11）。△後為永陽苦諫（唐⁵⁶⁵c）。

○真觀、惠裴の二法師を紹介する。あわせて淨人の白石、阿甘を送る。△永陽王手書属真觀、惠裴二法師（百17）。

○他に△陳永陽王手自書三書（百15）。△於即化移海岸法政甌閩、陳疑請道、曰昇山席（唐⁵⁶⁵b）の記事が注意される。

5 徐陵。

○当世の文雄意を屈す。△僕射徐陵德優名重、夢其先門曰、
禪師是吾宿世宗範、汝宜一心事之、既奉冥訓資敬尽節參不失
時序、拝不避泥水、若蒙書疏則洗手燒香冠帶三礼、屏氣開封
對文伏讀句句称諾、若非微妙至德、豈使当世文雄屈意如此耶
(別¹⁹²d)。△与法喜等三十余人在瓦官寺創弘禪法、僕射
徐陵、尚書毛喜等、明時貴望學統釈儒、並稟禪慧、欣重頂載
時所榮仰(唐⁵⁶⁴b)。

○法華經題の法席に参加する。△〔2〕2沈君理の項参照。△

陵和南、昨預沈儀同法席、餐奉甘露無畏之吼、衆咸帰伏、
然正法炬朗諸未悟、自慶余年得逢妙說、尋事諮展此不
申レ心、謹和南(百19)。

○天台入山を慰留す。△2宣帝の項参照。△(前略)近与徐
丹陽諸善知識共詳量、等是一山鍾嶺天台亦何分別、必希善加
三思、不滯於彼我京師弥可言レ師、一二因拔師口具其間
願敬道徳、弟子毛喜和南(百20)。

○放生の池のこと。△2宣帝の項参照。△陵和南、放生星

聞公家極相隨喜事是拔公口具、謹不_ニ多諧、唯遲拔公廷出數
百里水_ニ全其命根_ニ如レ此功德算數無_レ尽、隨喜無_レ量此不_ニ委
詔、弟子徐陵和南(百19)。

○修禪師の勅号。△2宣帝の項参照。

○還都の上奏。△3少主の項参照。
○淨名經疏について。△智者頻辭不免、乃著淨名經疏、河東
柳顧言、東海徐陵、並才華族胄、応奉文義緘封寶藏、王躬受
持(別¹⁹⁵c)。

○他に、陳左僕射徐陵書(百19)参照。

6 毛喜。

○当世の文雄。△5徐陵の項参照。

○法華經題の法席に参加する。△〔2〕2沈君理の項参照。

○天台入山を慰留す。△5徐陵の項参照。

○修禪寺の勅額を寺門に安す。△2宣帝の項参照。

○法喜との問答。△学士法喜、凡事十七禪師、年登耳順方逢
智者、陳尚書毛喜、嘲之曰、尊師猶少、弟子何老。答曰。所
事者德、豈在於年、又問曰、何者為德、答曰、善巧說法即後
代富樓那、破魔除障即是優波鞠多、毛喜自善其辭談之朝野
常為口實(別¹⁹⁷b)。

○その他に、南岳の信を伝う。△陳吏部尚書毛喜書凡五書
(百20)参照。

○放生碑文の勅撰。△2宣帝の項(別¹⁹³c)参照。△天台山修
禪寺智顗禪師放生碑文、陳通直散騎常侍国子祭酒東海徐孝克

7 徐孝克。

撰（百21）。国子祭酒徐孝克宿植_ニ德本_一才地兼_レ美、聞_ニ斯積善_一請樹_ニ高碑_一（唐104）。△2宣帝の頃（唐567c）参照。

8 晋王楊廣。煥帝。

○淨戒を希うがゆえに、四願を容れる。△先師、初陳_ニ寡徳_一、次讓_ニ名僧_一、後挙_ニ同学_一、三辭不免、仍求四願（中略）許_ニ此四心_一乃赴_ニ優旨_一、大王方希_ニ淨戒_一故妙願唯諾（別194c）。△顎初陳_ニ寡徳_一、次讓_ニ名僧_一、後挙_ニ同学_一、三辭不免、乃求_ニ四願_一、其辭曰（中略）許_ニ此四心_一乃赴_ニ優旨_一、晋王方希_ニ淨戒_一、妙願唯諾（唐566a）。

○「請戒文」を製す。△請戒文曰、弟子基承積善生在皇家_ニ：開皇十一年十一月二十三日、於_ニ總管金城殿_一設_ニ千僧會_一敬屈授_ニ菩薩戒_一：視四年猶如一子（別195a）。△王受菩薩戒疏（百26）の要約。この時、淨人善心年十一なるを賜う。△製_ニ請戒文云。弟子基承積善生在_ニ皇家_一（中略）等視_ニ四生_一猶如_ニ一子_一（唐566b）。

○荆楚に往くを留む。△王謝書（百27）。王參書（28）。王請留書（28）。王重留書（30）。王許行書（31）。△願使福德增繁用昌家國、便欲_レ返_ニ故林_一、王仍固請、頤曰、先有_ニ明約_一事無_ニ兩違、即_レ払_レ衣而起。王不_ニ敢重邀、合掌尋送至三千城門、顧曰、國鎮不_レ輕、道務致隔、幸觀_ニ弘護在_レ懷、王礼望目極銜_レ泣而返（唐566b）。

○蔣州の僧毀寺を論ず。△蔣州僧論毀寺書（百32）。述蔣州僧書（33）。王答蔣州事（34）。

○江州匡山寺について。△述匡山寺書（百35）。王答匡山書（36）。王与匡山三寺書（37）。王謝法門書（38）。△王遣使往匡山參書（39）。△王重遣匡山參書（40）。△便沂_レ流上江、重尋_ニ匡嶺、結_レ徒行道頻感_ニ休徵_一、百越邊僧、聞_レ風至者累_レ迹相造（唐566c）。

○潭州遣使のこと。△王遣使潭州迎書（百41）。

○當陽縣玉泉山に玉泉寺を建つ。△大王麾駕貴州臨江、奉送供給隆重転倍於前、既值使風朝發夕還、而諸宮道俗延頸候望、扶老携幼、相趨戒場、垂黑載白雲屯、講座聽衆五十余人、旋鄉答地荆襄未聞、既慧曰已明福庭將建、於當陽縣玉泉山而立精舍、蒙勅賜額號為一音、重改為玉泉（別195）。△王遣使荊州迎書（百42）。王入朝遣使參書（43）。文皇帝勅給荊州玉泉寺額書（44）。王枉京遣書（45）。王從駕東嶽於路遣書（46）。玉泉寺碑（94）。△又上_ニ諸宮鄉壤、以答_ニ生地恩_一也、道俗延頸老幼相携、戒場講坐衆將_レ及_レ万、遂於_ニ當陽縣玉泉山_一立_ニ精舍、勅給_ニ寺額_一名為_ニ一音_一（唐566c）。

○都に還ることを請う。△其年王使奉迎荆、人違覲向方遙礼臨岐望絕、既而重履、江淮道俗再馳欣戴、大王尸波羅密先到彼岸、智波羅密今從稟受、請文云、弟子多幸謬稟師資、無量劫來悉憑開悟（中略）今之慊言備歷素欵、成就事重請棄飾辭

(別195b)。△王謝天冠并請義書(百48)の要約文。△其年晋王又遣手疏請還辭云。弟子多幸謬稟三師資、無量劫來悉憑開悟、(中略)今之慊言備瀝素欵、成就事重請棄飾詞。(唐566c)。

△答曰。謬承人汎擬迹師資、顧此膚疎以非時許、況隆高命弥匪克當、徒欲沈吟必乖深寄(別195b)。△讓請義書(百49)。顥答書云、謬承三主擬迹師資、顧此庸微以非時許、況隆高命弥匪克當、徒欲沈吟必乖深寄。(唐566c)。

△重請云、學貴承師事推物論(中略)樂說不窮法施無尽、復使柳顧言、稽首虔拜(別195b)。△王重請義(百50)。△王重請云、學貴承師事推物論(中略)樂說不窮法施無尽(唐567a)。

○淨名經疏を受持する。△智者頻辭不免、乃著淨名經疏、河東柳顧言、東海徐陵、並才華族胄、應奉文義、緘封寶藏、王躬受持(別195c)。△令造淨名疏、河東柳顧言、東海徐儀、並才華胄績、應奉文義、緘封寶藏、王躬受持(唐567a)。

○蕭妃の疾を治す。△後蕭妃疾苦、医治無術王遣開府柳顧言等致書請命願救所疾、又率侶建齋七日、行金光明懺至第六夕、忽降異鳥飛入齋壇、宛轉而死、須臾飛去、又聞豕吟之声、衆並同屬、顥曰、此相現者、妃當愈矣、鳥死復蘇、表蓋棺還起、豕幽鳴顯示齋福相乘、至三十翌日、患果遂瘳、王大嘉慶(唐567a)。

○國清寺基を定むること。△又画作寺圖以為式樣、誠囑僧衆、如此基陞礪我目前宇棟成就、在我死後我必不覩、汝等見之後、

若造寺一依此法、弟子疑曰、此處山澗險崎、有何緣力能得成寺、答云、此非小緣乃是王家所弁、合衆同聞互相推測、或言、是姓王之王、或言是天王之王、或言是國王之王、喧喧成論竟不能決、今事已驗方知先旨、乃說帝王之王、標寺基已(別196a)。△故知皇太子寺基此瑞驗矣、王家造寺斯又驗矣、三国成一斯又驗矣、寺名國清、此又驗矣、靈瑞毀勤聊翩四驗古今可以為例焉(別196c)。△天台山衆謝啓(百69)。天台衆謝造寺成啓(73)。勅立國清寺名(87)。表國清啓(88)。勅度四十九人法名(89)。國清寺衆謝啓(90)。勅造國清寺碑文(93)。△初帝於蕃曰、遣信入山迎之、因散什物標域寺院、殿堂厨宇以為國様、告弟子曰、此非小緣所能締構、當有皇子為吾造寺、可依此作、汝等見之、後果如言事見別伝(唐567c)。

○天台下山のこと。△其冬十月、皇上歸蕃、遣行參高孝信入山奉迎……隨信出山行至石城乃云、有疾、謂智越云、大王欲使吾來、吾不負言而乘也。吾知命在此、故不須進前也(別196a)。△王迎入城礙雨移日書(百59)。王迎入城書(60)。王遣使入天台參書(61)。王遣使入天台迎書(62)。王參病書(63)。○遺書を与うこと。△王後答遺旨文并功德疏慰山衆文並在別本(別196c)。△遺書与晋王(百65)。王答遺旨文(66)。王遣使入天台建功德願文(67)。王弔大眾文(68)。△又出所制淨名疏并犀角如意蓮華香爐、与晋王別遺書七紙、文極該綜詞采風

標、囑以_ニ大法_一（唐⁵⁶⁷_b）。

○著書を符命のごとく重んじたこと。△所レ著法華疏、止觀門、修禪法等、各數十卷、又著淨名疏_ニ至_ニ仏道品_ニ有三十七卷、皆出_レ口成_レ章、侍人抄略、而自不_レ畜_ニ二字、自余隨_レ事流符命_ニ乃_レ臨_ニ大宝、便藏_ニ諸麟閣_ニ所以声光溢_ニ于宇宙_ニ威相被_ニ于当今_ニ矣（唐⁵⁶⁷_c）。

○諱日の設斎。△毎年諱日、帝必廢_レ朝、預遣_ニ中使_ニ就_レ山設_レ供（唐⁵⁶⁷_c）。△王遣使入天台設周忌書（百70）。皇太子於天台設斎願文（76）。

○帝自ら碑を製すること。△隋煬末歲巡幸江都、夢感智者、言及遺寄、帝自製_レ碑、文極宏麗、未_レ及_ニ鐫勒_ニ值_レ乱便失（唐⁵⁶⁸_a）。

○淨名疏を弘む。△皇太子弘淨名疏書（百81）。

○尚、皇太子と出るのは、僧使対皇太子問答が（百74）その最初。又、仁寿四年皇太子登極天台衆賀至尊（百82）は、皇帝となつた最初の記録である。

9 柳顧言。

○淨名經疏について問う。△8晋王広（別¹⁹⁵_c唐⁵⁶⁷_a）の項参考照。△秘書監柳顧言書（百101）。

○蕭妃医治の遣使。△8晋王広（唐⁵⁶⁷_a）。△晋王遣使として

は、王謝書（百27）。王請留書（29）。王重請義書（50）。答放徒

流書（57）。答旋物書（58）。などがある。

○保恭と共に棲霞寺に請延せんとす。△蔣山棲霞寺保恭請疏（百100）。

○南嶽慧思の碑を製す。△王答遺旨文（百66）使_レ製_ニ南嶽師碑、即命_ニ開府學士柳顧言_ニ為_レ序自撰銘頌。

○國清寺碑文を製す。△勅造國清寺碑文（百93）。僧使對問答（86）。辭出到_ニ棲靈寺_ニ秘書監柳顧言來_レ勅云、我意令下公為_ニ智者_ニ製_ニ碑、若非_ニ公作_ニ則不_レ得_ニ我心_ニ可_レ語_ニ僧使_ニ急將_ニ行狀_ニ出_上至_ニ三月_ニ即取_ニ碑成_ニ、勅_ニ楊州僧五十人_ニ云、經論之内若為_ニ尊_ニ於師氏_ニ勝_ニ於智者_ニ上

○智者の入道の縁由等を灌頂に諮す。△灌頂多幸謬逢嘉運、濫齒輪下十有三年、戴天履地不測高深、以開皇二十一年遇見、開府柳顧言賜訪、智者、俗家桑梓、入道緣由、皆不能識、克心自責微知醒悟、仍問遠祖於故老、即詢受業於先達、瓦官前事或親承音旨、天台後瑞隨分憶持、然深禪博慧妙本靈迹、皆非淺短能知、但恋慕玄風無所宗仰、輒編聞見若奉慈願、披尋首軸涕泗俱下謹狀（別¹⁹⁷_c）。

〔2〕『別伝』『百錄』に通ずる人。

1 蕭繹。孝元帝。

○父起祖賓客となる。△父起祖學通經伝、談吐絕倫、而武策

運籌偏多勇決、梁湘東王蕭繹之荊州、列為賓客、奉教入朝領軍（別^{191 a}）。

○使持節散騎常侍益陽縣開國侯（別^{191 b}）。

○年十五にして、孝元の敗に值う。△年十五值孝元之敗、家國殄喪親屬、流徒歎榮会之難久、痛凋離之易乃（別^{191 b}）。

○惠裴に師事す。△永陽王手書屬真觀惠裴二法師（百17）。裴是梁湘東王蕭繹門師、觀出浙江永陽王嘗師事之（夾注）。

2 沈君理。

○瓦官寺に法華經題を開くを請う。△儀同沈君理、請住瓦官開法華經題、勅一日停朝事、群公畢集、金紫光祿王固、侍中孔煥、尚書毛亮、僕射周弘正等、朱輪動於路、玉珮喧於席、俱服戒香、同浪法味（別^{192 b c}）。△陳儀同公沈君理請疏（百18）。

陳左僕射徐陵書（19）。〔1〕5徐陵（百19）の項参照。

3 趙君卿。 5 黃吉寶。 4 朱雷。 6 陳建宗。

○陳少主遣使。△陳主、初遣伝宣左右趙君卿、再遣主書朱雷、三伝遺詔、四遣道人法昇、皆帝自手書、悉称疾不当、陳主遂仗三使更刺州敦請（別^{194 a}）。△至德三年陳少主勅迎（百11）。五勅。△因又降勅、前後七使、並帝手疏、頤以道通惟人王五法寄、遂出都焉（唐^{565 c}）。

○路次に勅す。△路逢兩使、初遣応勅左右黃吉寶、次遣主書陳建宗（別^{194 b}）。△路次迎陵勅書迎候（百11）。第五勅。△至開陽門舍人陳建宗等宣少主口陳（12）。十二勅のうちの第一勅。

○菩薩戒を受く。△太子已下並託舟航咸宗戒範、以崇津導先師、虛己亡受能安籠辱故澹無驚喜、皇太子請戒文云、淵和南、仰惟化導無方隨機濟物（中略）今二月十五日於崇正殿設千僧法會、奉請為菩薩戒師、謹遣主書劉璿奉迎（別^{194 b c}）。△少主皇太子請戒疏（百14）。永陽王解講疏（16）皇太子起居万福。△儲后已下並崇戒範故受其法、文云、仰惟化導無方隨機濟物（中略）今奉為菩薩戒師（唐^{566 c}）。

○少主遣使。△前の7少主の項に同じ。

○安州方等寺に延屈す。△秦孝王、聞風延屈先師對使而言、雖欲相見終恐緣差、既而王人催促迫不得止、將欲解纜忽值大風累旬之間、妖賊卒起水陸壅隔遂不成行（別^{194 c}）。△秦孝王書（百23）二書。天台國清寺智者禪師碑文（93）。秦孝王作鎮淮

海遣信迎屈對使者曰、雖欲相見終恐緣差、即累旬大風妖賊競起水陸俱阻、安坐匡岫既而竈游龕難仍代孝王爰屈邦域潔誠延請。

10 王弘。

○國清寺を造営す。△司馬王弘依図造寺、山寺秀麗方之积宮(別^{196c})。△王答遺旨文(百66)。△遺旨以天台山下遇得一處非常之好、垂為造寺始得開翦林木位置基階今遺司馬王弘創建伽藍一遵指画天台山衆謝啓(69)。司馬王弘至。皇太子重令書(79)。右庶子王弘、宜令施天台

11 丘彪。 13 衛伯玉。

12 房伯奴。 14 張造。

○靈瑞を見る。△其年十月十八日、有海州連水県人、丘彪、昼發誓於龕、夜見僧排戶、彪即起礼拜云、勿拜安隱無慮也、

達寺一匝、彪隨後、奉尋出門數步奄然便失(別^{197a})。△僧使

對皇太子問答(百74)。對云到其月八日、海州連水県人於丘彪、枉山頂鋸木暮旦拜龕求乞平安、日日如此即於亥時始欲就臥、忽見一僧執杖排戶而進、彪匪攘欲起已到牀前語云、好努力當得平安、彪忴爾爾而又致拜、拜起見出戶邊修禪寺一帯、面何弘殿、擎杖指撫、撫竟出門、行二十步隱不復見、彪從後行委悉瞻視、旦向僧說、僧問披服何衣、答披鵝納、僧引入香牀示生平本納、彪云、色狀正爾。

△當其月十二日、有海州沐陽縣人、房伯奴衛伯玉、於智者旧室而見其形床事相如在(別^{197a})。△對云、到三十八年十一月二日午時、有海州沐陽縣須仁鄉義全里軍人房伯奴、徐州釗縣眸陵鄉東釗里軍人衛伯生、二人於先師旧房階治地此房門簾先卷忽見一僧入房、手自下簾、二人疑是神異、進房尋覓了復不見、驚駭報僧說如上事(百74)。

△開皇十九年十一月六日、土人張造、年邁脚蹶、曳疾登龕、拜曰、早蒙香火願來世度脫、仍聞龕內應声、又聞禪指、造再請云、若是冥力重賜神異、即復如初、造泣而拜忘返(別^{197a})。△對云、到三十九年十一月二十六日、土人張造拜龕云、本蒙香火願世世度脫、即聞彈指、四顧無人、重呪願、審是靈願更彈指、即復重聞、造具向陳叙此瑞(百74)。

〔3〕『別伝』「智顥伝」に通ずる人。

1 始興王叔陵。

○瓦官寺に談論す。智喜ばず。△陳始興王出鎮洞庭、公卿錢送皆廻車瓦官、傾捨山積慶拜殷重因而歎曰、吾昨夜夢逢強盜、今乃表諸軟賊、毛繩截骨則憶曳尾泥間、仍謝遣門人曰、吾聞闇射則忴於絃、無明是闇也、脣舌是弓也、心慮於弦音声如箭、長夜虛發無所覓知、若益一人心弦則忴、又法門如鏡方圓如像、若緣牽心轍轍無尽、若緣杜心自然蹇渢、昔南嶽輪下及始濟江東法鏡屢明心弦、數忴初瓦官、四十人共坐、二十人

得法、次年百余共坐、二十人得法、次年二百人共坐、減十人得法、其後徒衆転多得法転少、妨我自行化導可知、群賢各

隨所安吾欲從吾志（別^{192c}）。△會陳始興王出鎮洞庭、公卿餞送、廻車瓦官、與顥談論、幽極既唱貴位傾心、捨散山積虔拝

殷重、因歎曰、吾昨夢逢強盜、今乃表諸軟賊、毛繩截骨、則憶曳尾泥中、仍遣謝門人曰、吾聞闇射則應於弦、何以知之、無明是暗也、脣舌是弓也、心慮如弦、音声如箭、長夜虛

發無所覺知、又法門如鏡、方圓任象、初瓦官寺四十人坐、半入法門、今者二百坐禪、十人得法、爾後歸宗転倍、而拏法

無幾、斯何故耶、亦可知矣。吾自行化導可各隨所安、當從吾志也（唐^{564c}）。

2 袁子雄。

○淨名の講に感じて講堂を改造す。△有陳郡袁子雄、奔林百

里、又新野庾崇、斂民三課、兩人登山值講淨名、遂斎戒連辰、專心聽法、雄見堂前有山瑠璃映徹、山陰曲澗琳瑯布底、跨以虹橋填以寶飾、梵僧數十皆手擎香爐從山而出、登橋入堂威儀

溢目、香煙徹鼻、雄以告崇、崇稱不見、並席天乘其在此矣、

雄因發心改造講堂、此事非遠、堂今尚在（別^{193b}）。△令陳郡

袁子雄、崇信正法、每夏常講淨名、忽見三道宝階從空而降、有數十梵僧乘階而下、入堂禮拜、手擎香爐遍頌三匝、久之乃滅、雄乃大眾同見驚歎山喚、其行達靈感皆如此也（唐

^{565b}）。

3 王積。

○玉泉山に智者を拝す。△荊州總管上柱國宜陽公王積、到山禮拝戰汗不安、出而言曰、積屢經軍陣臨危更勇、未嘗怖懼頓如今日（別^{195b}）。△總管宜陽公王積、到山禮拝戰汗不安、出曰、積屢經軍陣、臨危更勇、未嘗怖懼頓如今日（唐^{566c}）。

〔4〕『別傳』だけに出る人。

1 朱弔。

○陳起祖を歎す。△朱弔見而歎曰、若非經國之才、孰為英王之所重乎（別^{191a}）。

2 王琳。

○法具を資給す。△時王琳拋湘、從琳求去、琳以陳侯故旧、又嘉此志節、資給法具、深助隨喜、年十有八、投湘州果願寺沙門法緒而出家焉（別^{191c}）。

3 何凱。

○朝野に名を弘む。△共法喜等二十七人同至陳都、然上德不德又知音者寡、有一老僧、厥名法濟、即何凱之從叔也、自矜禪學倚臥、問言、有人入定聞攝山地動、知僧詮練無常、此

何禪也、答曰、辺定不深、邪定闇入、若取若說定壞無疑、濟

驚起謝曰、老僧身嘗得此定、向靈耀則公說之則所不解說已永失、今聞所未聞、非直善知法相、亦乃懸見他心、濟以告凱、

凱告朝野、由是聲馳道俗請益成蹊（192 b）。

4 王固。 6 周弘正。

5 孔煥。

○法華經題の法席に參ず。 △〔2〕2 沈君理（192 b c）の項参照。

10 陳文帝。

○放生池の書を著わす。△沙門慧承、群守錢玄智、皆著書嗟

詠、文繁不載（193 c）。

9 錢玄智。

慧拔金陵表聞（193 c）。△〔5〕11 計尚兒の項参照。

7 庾崇。

○陳文、皇太子永陽王と出る。△〔1〕4 永陽王（193 c）の項参照。

11 高孝信。

○天台下山を迎える遣使。△〔1〕8 晉王（195 c）の項参照。

8 計詡。

○金光明經を講ぜんことを請う。△干時計詡臨郡請講金光明經、濟物無偏寶冥出窟、以慈修身見者歡喜、以慈修口聞声發心、善誘殷勤導達因果、含境漁人改惡從善好生去殺（193 c）。

○靈夢を感じて罪を許さる。△詡後還都、別坐余事因繁廷尉、

臨当伏法遙想先師、願申一救、其夜夢群魚巨億不可稱計、皆

吐沫濡詡、明旦降勅、特原詡罪、當於午時忽起瑞雲、黃紫赤白狀如月暈、凝於虛空遙蓋寺頂、又黃雀群飛翻動嘈囂、棲集簷宇半日方去、師云、江魚化為黃雀、來此謝恩耳、師遣門人

○臨終に会う。△當唱經時、吳州侍宮張達等、伴五人自見大仏、倍大石尊光明滿山、直入房內諸僧、或得瑞夢、或見奇相、雖復異處而同是、此時唱經竟（196 a b）。

12 張達。

○靈驗を見る。△土人、馬紹宗居貧、好施刈稻百束以供寺僧、

執役疾勞身如有疾、心作是念、我由施故而感斯患、未測幽冥當有報否、因極寢臥夢、見智者加趺坐一床、燒香如霧安慰紹

宗、汝家貧好施何疑無福、種種勸喻辭繁不載、爾夜宗兄及宗妻母三人共夢、晨朝各說異口同言、香氣盈家經日不歇、宗親感歎冥聖不遙（^{196c}）。

△仁壽二年八月十三日、沂州臨沂縣人、孫抱長、午前於龕所奉見信心殷重、後限滿被替獨到龕所、辭別酒淚向僧說如此（^{197a}）。

△大業元年二月二十日、土人張子達、母姦氏、年登九十患一脚短、凡十八年自悲己老、到墳奉別設斎專至、即覺短脚還申、行步平正宛如少時、此嫗悲喜見人即述、遂積天台以為常則（^{197a}）。

16 陳鍼。

17 張果。

○方等懺を行じて寿を延ばす。△梁晉安王中兵參軍陳鍼、即智者之長兄也。年在知命、張果、相之死在晦朔、師令行方等懺、鍼見天堂牌門、此是陳鍼之堂、過十五年當生此地、遂延十五年寿、果、後見鍼驚問、君服何藥、答但修懺耳、果云、若非道力、安能超死耶（^{197c}）。

18 方茂。

○坐を習う。△梁、方茂、從師習_レ坐、忽発身通微能転舉、智者呵云、汝帶妻子何須學、此宜急去_レ之（^{197c}）。

19 蔣添攷。

20 吳明徹。

○息法を稟く。△大中大夫、蔣添攷、儀同公、吳明徹、皆稟息法、脚氣獲除、法雲遠覃、例皆如此（^{197c}）。

〔5〕『百縁』だけに出る人。

1 曹義。

○宣帝遣使。△陳宣帝勅留不許入天台（⁸）。〔1〕2宣帝（百8）の項参照。

2 景歴。

○宣帝神筆。△陳宣帝勅留不許入天台（⁸）。大建九年宣帝勅施物（⁹）。大建十年宣帝勅給寺名（¹⁰）。〔1〕2宣帝（百89¹⁰）の項参照。

3 蔡徵。

○少主神筆。△至德三年陳少主勅迎。五勅共。〔1〕3少主の項参照。

○賜訪を願う。△前陳領軍蔡徵書（⁹⁶）。

4 羅闡。

5 施文慶。

○少主口勅遣使。△至開陽門舍人陳建宗等宣少主口勅（¹²）十二勅の内、2、4～10、12勅は羅闡、第3勅は施文慶、第11

勅は李善慶の遣いである。

7 少主后沈。

○菩薩戒を受く。△少主后沈手令書(13)。永陽王解講疏(16)。安德宮太后菩薩寢興納豫、皇太子起居万福、諸王諸主咸保嘉慶。

8 陳文強。

○永陽王遣使。△陳永陽王手自書(15)。三書のうち第一書。

9 謹。

○永陽王の息子。△永陽王解講疏(16)。諸王諸主咸保嘉慶、未及弟子自身并息謙等内外眷属、一切因縁寿命長遠身心快樂、唯願頭揚三宝、通達五乘、戒与秋月俱明、禪与春池共潔、生生世世、与闍黎及講衆黑白見聞覺知恒結善友。

10 桂陽王伯謀。

○放生を隨喜す。△天台山修禪寺智顥禪師放生碑文(21)。桂陽王殿下、皇枝之貴、思恋間平、情崇孔穎、吐懸河之旨、擊

節證明、示半月之形、深心隨喜。

11 計尚兒。 13 陳要卿。

12 陳思展。

14 嚴統祖。

15 羊公賀。

○智者放生の縁由。△天台山修禪寺智顥禪師放生碑文(21)。宣猛將軍臨海内史計尚兒、子勲之胄、世顯方術、壳藥登仙、聞于昔漢、剖符作守、即此明時、請転法輪、講金光明經一部。前雲騎將軍臨海内史陳思展、及其猶子、陳要卿等、即土人也、戒章衣繡優秩家邦奉屈禪師、次講法華經典、白牙团扇初開律藏之門、玉柄塵尾旁闡經王之偈、繫珠始訓、親友醉除、夢鼓將鳴、梵魔疑遣、因廻雙明誠勤、広弁殃福、尚兒、仍撰諭籠王嚴統祖、羊公賀等群賢、凡百君子信誓斯立、丹誠恪勤、白業諸弁、嗟如棠之往累、歎釣濮之來緣、各捨扈業及魚梁等合六十三所、二緣樹下懸唱善哉、五旬座上遙聞彈指、巨海無際、一時清謐、衆生無辺同荷安快。

16 隋高祖。

○隋の政策に贊同されたいと勅す。△隋高祖文皇帝勅書(22)。○荊州玉泉寺額を給う。△文皇帝勅給荊州玉泉寺額書(44)。

17 李德林。 19 裴矩。

18 李元操。

○隋高祖遣使。△隋高祖文皇帝勅書(22)。開皇十年正月十六日、內史令安平公臣李德林宣內史侍郎武安子臣李元操奉、內史舍人裴矩行、

20 傳仲詵。

21 王灌。

○晋王遣使。△王遣使往匡山參書(39)。弟子總持和南、親信傳仲詵還、逮去月朔告用慰延、結熱猶熾、願道休和(中略)今遣主簿王灌、指往祇承、并貢別牒用忘存省、敢略繁辭、謹和南、七月一日。法衣六件。塩一百斛。米一百斛。右件其塩米悉出江州正倉王灌賣合魚開送。

22 秀。 24 鄭子良。

李元慘。

○隋高祖遣使。△文皇帝勅給荊州玉泉寺額書(44)。開皇十三年七月二十三日、兼內史令蜀王臣秀宣、內史侍郎武安子臣李元慘奉、內史舍人長坦男臣鄭子良行。

25 魯子營。

○晋王遣使。△王枉京遣書(45)。今遣統軍魯子營往祇承、謹和南。

26 達奚儒。

○晋王、玉泉寺の經營を依嘱す。△王与上柱國斬郡公荊州總管達奚儒書(55)。智者禪師德尊望重、近年紓道。爰授淨戒、今修治彼州十住寺、造立西徂玉泉寺、竝見請為檀越。復聞公等多結勝緣、大乘緣通、良深隨喜。師今遣僧使志果、法才二人、還就玉泉寺法璨、道慧法師、十住寺道臻法師、經理想加

心影響獎成妙業、公私覃福幽顯同賴法事遠白、不復喧涼也、楊廣呈、八月二日。

27 潘惠達。

張四娘。

○國憲を犯し、恩赦を賜う。△答放徒流書(57)。開府學士柳顧言宣教、金光明行法究竟如十五月清淨円演、恩放徒流矜免鞭罰、上開府潘惠達、儀同張四娘等凡四十五人賜令斟酌謹即依事詳。

29 李膺。

○智者の疾を治す。△王參病書(63)。總持和南、仰承出天台已次到剣石城寺、感患未歇、菩薩示疾枉疾亦愈、但於飄誠交用棟灼、今遣鑒李膺、往処治、小得康損、願徐進路遅禮觀無遠謹和南。

30 吳景賢。

○晋王遣使。△王遣使入天台設周忌書(70)。歲序推移日月如逝、智者遷化已將一周、追深悲痛、情不能已、念慕感動、何堪自居、今遣典籤吳景賢、往彼設斂、奉為三日追福、遲知一二、楊廣和南、開皇十八年。

31 張衡。

○皇太子宣令△僧使對皇太子問答(74)。仁壽元年十一月初三日、右庶子張衡宣令、僧使灌頂智璪進_二內齋、令旨自問、先師亡後有何靈異(中略)開皇二十一年改為仁壽元年、以_二晉王受_一皇太子。

△皇太子弘淨名疏書(81)。右庶子張衡宣令、慧曰道場僧慧莊、法論二師、於_二東宮_一講_二淨名經_一、全用_二智者疏_一判_二積經文_一、一日兩時躬親臨_二聽_一。……右庶子張衡宣令、引灌頂入辭面奉。……

：右庶子張衡宣令、別賜灌頂……。

△僧使對問答(86)。黃門侍郎張衡、宣勅云、師等是先師之寺

僧衆和合不_レ相_二諍競是非_二不_レ、璪欲_二起對_一、勅云、師坐師坐勿起、璪對云、門人一衆掃_二灑先師之寺_一、上下和如_二水乳_一、盡此一生奉_レ國行_レ道、不_レ敢有_レ競是非_二、常以寒心戰懼、勅云好、張衡又宣_レ勅云……。

32 張乾威。

○皇太子仁壽元年十二月十七日遣使。△皇太子敬靈龕文(75)。維隋仁壽元年歲次辛酉十二月十七日、丙寅、菩薩戒弟子皇太子總持和南、敬告天台山寺先師智者全身舍利靈龕之座……今遣員外散騎侍郎兼通事舍人、張乾威、送僧使灌頂等還_レ山於寺設_レ會、稽_二首接_一足十方三世一切三寶無量幽顯現前大衆、

以此功德_二仰資_一先師智者_二早証_一正覺。△皇太子於天台設齋願文(76)。以今大隋仁壽元年歲次辛酉十二月十七日、謹遣員

外散騎侍郎通事舍人張乾威、到_二天台山寺_一敬設_二蔬飯_一。△皇太子令書与天台山衆(77)。今遣貞外散騎侍郎張乾威、送僧使還_レ山於_二旧所_一設_レ供。……楊廣和南、僧使灌頂等所_レ領今施物目、仁壽元年十一月十七日……。△天台衆謝啓(78)。天台寺故智者弟子沙門智越一衆啓、使人兼通事舍人張乾威至、謹領前件物等。△勅報百司上表賀口勅(91)。我以_二仁壽元年_一遣張乾威往看儼然如_レ旧。

△勅度四十九人法名(89)。柱国内史令萬國公、臣未上、大都督兼內史侍郎臣虞世基、大都督朝散大夫兼內史舍人臣張乾威、勅度四十九人出家、剃落竟、使人令_二僧作_一法名灌頂、奉_二僧令_一依_二六事_一立_レ名。

33 張諧。

34 段智興。
35 蔡恪。

○皇太子遣使。△皇太子弘淨名疏書(81)。

△令_二楊州總管府遣參軍張諧、到_二天台_一有_二陪_一委智者法華義_二者一人、仍賈_レ疏入_レ京、使到_レ寺差_二灌頂_一隨_レ使忬_レ令、疏到付_レ司繕写、寫竟付_レ灌頂_一校勘、勘訖入_レ宮受持。

△今遣_二大都督段智興_一送_レ師還_レ寺、為_二和南_一、大衆好依_二先師法_一、用行_レ道化勿_レ損_二風望_一也。

△又遣_二楊州司功參軍蔡恪_一到_レ為_二智者_一設_二千僧齋_一。

36 李大方。

○寺号の奏上。△表國清啓(88)。伏聞勅旨欲立寺名、不敢默然、謹以啓聞謹啓、通事舍人李大方、奏聞、勅云、此是我先師之靈瑞即用即用、可取大牙殿榜、填以雌黃、書以大篆、付使人安寺門上。

37 蘆政力。

○国清寺額を送る。△序。勅取江都宮大牙殿榜、填以雌黃、書以大篆、遣兼内史通事舍人蘆政力、送安寺門、国清之称從而為始。

○皇帝遣使。△勅度四十九人法名(89)。遣兼通事舍人蘆政力、往指此不レ多、其使人蘆政力到寺宣勅賜寺物。△国清寺衆謝啓(90)。天台山国請寺沙門智越一衆啓、兼通事舍人蘆政力至、奉宣十月二十九日勅。

△勅報百司上表賀口勅(91)。使人蘆政力還奏、聞開先師龕墳不レ見舍利、又上行狀一卷、百司竝賀、勅語諸公云、智者是我菩薩戒師（中略）我以仁寿元年遣張乾威往看儼然如旧、昨更令蘆政力往親開、龕門閉塞無レ有開迹、遂不レ見

靈体、既已變化得道非レ虛、擁護利益之言必応レ無レ爽、今有行狀一卷、諸公等共觀レ之、諸州考使各写三通還所部流布。

39 蘆世基。

○皇帝遣使。△勅度四十九人法名(89)。32張乾威の項参照。

40 周武帝。

○破仏のこと。△勅造国清寺碑文(93)。△鑑周武之滅三大法、乃高蹈豫士翔集天台。

41 元襄王。

○石城寺の石像。△行百余里到剝東之石城寺、寺有三百尺金續石像、梁太宰南平元襄王鑄創、自有靈迹、因レ此現レ疾(93)。

42 皇甫毗。

○玉泉寺碑を撰す。△玉泉寺碑(94)。当陽県令皇甫毗撰。

43 蕭琮。

○智者を延請せんことを願う。△後梁主蕭琮書(95)。遠欽高風、未レ獲展侍、慨然西顧以レ日易レ年、承遊止玉泉、創構坊宇、名僧雲会、問道遠集、山林佳勝、有助禪悅、即事倏然風雲永歎涼暑、珍蓄統附承修神足今還、敢申訊謁、信駿有レ会、方願祇承、蕭琮和南。

44 陳子秀。

○法華を講ずるを請う。△荊州道俗請講法華疏(99)。導因寺東嚴菩薩戒弟子陳子秀等、稽首和南（中略）謹請開皇十三載

八月十日

45 蕭通國。

○晋王使人。△秘書監柳顧言書(10)。(前略)大王今遣使人蕭通國、參承書意。自當仰簡頻被顧問。奉答必來、伏願夏竟便待舟檣、異此殘生尽レ心聽受懺悔。往日懈惰昏沈、謹啓。

46 解拔國。

48 王宣武。

47 孔玄達。

○放生池に關する遺書。△智者遺書与臨海鎮將解拔國述放生池(10)。△仍率勵山僧、貨衣資什物、就土民孔玄達等、買茲漁業、永作放生之池。△昔貧道西遊路經岳州、刺史王宣武、仍結香火稟受大乘、而彼地民不レ事農桑專行殺捕之業、學士曇捷、請講遂即停留、一州五縣咸捨其業、凡一千余所、以事表臺降勅開許、自是岳州頻降詳瑞、使君宣武旌賞倍常、至尊神智高明、有感皆應、豈容下為軍民口味奪人善業。

〔6〕「智顥傳」だけに出る人。

1 陳暄。

○智者をして都に還らしめよとの上奏。△〔1〕3 陳少主の項参照。

2 徐儀。

○淨名疏の文義を奉ず。△〔1〕8 晉王広の項参照。

3 蕭妃。

○金光明懺を行じて疾を治す。△〔1〕8 晉王広の項参照。

4 楊素。

○龕墳を檢す。△而枯骸特立端坐如生、瘞以石門閉以金鑰、所有事由一閔別勅……尚書令楊素、性度虛簡事必臨信、乃陳其意、云何枯骨特坐如生、勅授以戶鑰、令自尋觀、既如前告、得信而帰(56a)。

〔訂正〕拙稿「智顥滅後の天台教団と動向」(前掲)に誤記がありましたので訂正します。「4」別伝のみに出る人の表に、則公¹⁹²b 靈耀、慧綽¹⁹³b、の二例を加え、「5」百錄のみに出る人の表に、曇捷¹⁰⁴学士、の一例を加える。したがつて「天台靈應図本伝集」所収の「別伝」に関する註記のなかで、「この本は銛法師の名を記さない」のは正しいが、正藏所収本も、靈耀則公は記すから、「この本は(則公を記す)まで」の十一字は削除。又、法緒の名はこの本にも出るから誤り。